

平成 30 年 3 月 1 日

越谷保育専門学校
校長 山崎芙美夫

平成 29 年度第 2 回教育課程編成委員会報告の公表について

教育課程編成委員会による本校の「平成 29 年度第 2 回教育課程編成委員会報告」を公表します。

1 委員名簿 委員長 山崎芙美夫委員 副委員長 美入昌男委員

(1) 外部委員(五十音順)

池田 祥子	社会福祉法人杉の子保育会理事
石田 高幸	学校法人石田学園理事長 社会福祉法人わせだ会わせだっこ中央保育園長
植竹 清文	学校法人植竹学園認定こども園わかばの森園長
岡 美那子	社会福祉法人 まあれ愛恵会 さいたまたいよう保育園長
山田 陽子	十文字学園女子大学 人間生活学部 幼児教育学科長 教授

(2) 学校側委員(五十音順)

山崎芙美夫	学校法人ワタナベ学園理事長兼越谷保育専門学校長
美入 昌男	越谷保育専門学校副校長
会田 秀樹	同 学科長
古塩 秀明	同 事務長
東海林 孝	同 教務部学科主任
渋谷るり子	同 教務部学科主任
菊地 秀典	同 事務長代理

2 教育課程編成委員会開催状況

- (1) 日 時 平成 29 年 11 月 27 日(月)午前 11 時 30 分～12 時 00 分
- (2) 会 場 越谷保育専門学校 201 教室
- (3) 参加 委員 上記外部委員 4 名(欠席池田委員)、学校側委員 5 名(欠席会田、菊地)

3 委員会次第

- (1) 開会
- (2) 校長挨拶 省略
- (3) 委員長選出 山崎校長
- (4) 協議
 - ア 平成 30 年度教育課程編成に向けて
 - イ 教職課程再認定に向けて
- (5) その他
- (6) 閉会

4 第 2 回委員会議事要録 別紙のとおり

平成 29 年度越谷保育専門学校 第 2 回教育課程編成委員会議事要録

平成 29 年 11 月 27 日

- 1 委員の紹介 省略
- 2 校長挨拶 省略
- 3 議長選出 山崎校長
- 4 協議事項

(1) 平成 30 年度教育課程編成に向けて

(学校) 次年度平成 30 年度に向けたカリキュラム等の変更は行っていない。

平成 31 年に向けて指定教員養成機関では再指定の審査という形で進められ、新しい手引きが文科省から届いた。

再指定に係る提出書類は平成 30 年 6 月 29 日までに日程が変更になり、猶予ができた。平成 29 年 10 月 8 日に行われた保育士養成課程等検討会において平成 31 年度からの保育士養成課程の変更スケジュールが発表された。スケジュールが 10 月 8 日に出され、年内をめどに見直し案が発表されるということだったが、11 月末から 12 月に発表というスケジュールが今日現在発表されていない。保育士課程も一部変更ということで併せて教育課程を見直していく必要が出てきた。再指定における会議は行っているが、本校では具体的にシラバスの提出時期について、様式についてなどまだはっきりしない状況である。引き続き指導大学である十文字学園女子大学の担当指導の関係職員と連携し、及び指導を仰ぎ進めたい。情報等がございましたらご教授いただきたい。

(委員) 大学も同じであり、早く情報をキャッチしたい。

本学では 12 月 22 日をシラバス及び業績に関する書類の締切日としている。文科省の締切が大学と専門学校では違うため、比較はできない。とにかく乗り越えなくてはいけないという気持ちで対応している。

(2) 教職課程再認定について

(委員) 大変ではあるが、授業内容等の改善・工夫に繋がっていくというように前向きに取り組んでいきたい。こういう変化の時というのは見直しできて、大事なことは残しながら新しいところにチャレンジしていく良いチャンスだと思う。

(学校) 平成 30 年度のシラバスにどこまで内容を盛り込むのか、大学で共通認識はあるのか。平成 30 年度はコアカリキュラムが出る前のものであって、平成 31 年度は新しいコアカリキュラムのものだと思う。

- (委員) コアカリキュラムは尊重すべきものである。全部のコアカリキュラムを読み解いたわけではないが、教員が大事にしているところから離れているものではない。視野を広げるといふか新しいものをつくりあげることが、今大事にしているものを広げていろいろな角度から見直す時にコアカリキュラムが役立つのではないかと考えている。文言に反映されないそこに込める思いというのは各教員に任されている、と捉えている。
- (委員) 文言だけが先に走っていくのではなくて、原点にかえり、子供と生活しながら保育はつくっていくものであって、そこをはずすと保育が保育でなくなってしまう。どういう言葉を使うかに振り回されて、学生や子どもたちの何を育てたいか飾られた言葉が一人歩きになってしまうと表向きの内容になってしまうおそれを感じる。
- (学校) 専門学校向きだと感じたのは実践的な指導力である。教育実習でつまずいてしまう今の学生に不足しているのではないか。教育実習等で訪問した園長や指導者を集めて会議をし、いただいた提言をもとに指導を変えていく必要がある。何が足りないか考えて指導していかなければいつまでも実践的な指導力が足りないことになってしまう。全体的なことを考えたときにどうやって育てていくのか。
- (委員) 教育実習の単位は決まっているのか。学校単位で増やしたりできるのか。現場研修がしっかりできている、時間が多い、それが魅力なのではないか。短大・大学と同じような内容では差別化がされていない。学術的なものよりはそちらを増やしていく方向性が養成校の特色ではないか。
- (学校) 定めがあるので定めの中でどういうふう実践的なものを身につけさせるような授業形態をやっていくということ。
- (委員) 越谷保育専門学校の学生を採用したら半年くらいでしっかり子どもの前で、コミュニケーションとれるようにしてもらえると安心できる。1年2年経っても先輩についていないと動けないのでは大変である。
- (学校) 現場の先生からさすが越谷保育専門学校の卒業生だねと、この言葉がもらいたい。そのために授業研究してください、アクティブラーニングしてくださいなどをお願いします。結果としてさすがだねと言われるのが望ましい。逆の場合は反省しなければならない。
- (委員) 越谷保育専門学校では附属の認定こども園等を活用していると思うか。
- (学校) 文科省から決められている時間を確保しつつ、それ以外で5回の実習体験を行っている。巡回するものの学生一人ひとり全て把握できるわけではないので、実習体験では難しいこともある。